

## 英語と日本語における〈右〉と〈左〉に関する語彙の意味拡張について

### The Semantic Extension of the Words Related with "Right" and "Left" in English and Japanese

松 井 真 人  
Mahito Matsui

Abstract: This paper investigates the semantic extension of the words related with "right" and "left" in English and Japanese. It also examines the physical and cultural bases of the extension. In both languages, while the words related with "right" have the meanings "normal" and "superior," those related with "left" have the meanings "abnormal" and "inferior." I argue that those non-spatial meanings were derived on the basis of the functional superiority of the human right hand over the left and the dualistic view of the world that divides realities into sacred and secular things. In some Japanese expressions this semantic contrast of "right" and "left" is reversed. I argue that this reversal stems from the superiority of "left" found at certain periods in Chinese and Japanese history.

キーワード：右、左、意味拡張、身体性、文化

#### 1. 序論

我々が日常用いる概念は、大きく分けて2種類ある。その1つは、上下、前後、内外、明暗、物体、容器のような日常の身体経験から直接理解される概念である。例えば、我々が生活する空間には重力があり、その作用によって物体が落下するのを目撃したり、重力に逆らって直立の姿勢をとる。そのような身体経験から上下という概念が理解される。Lakoff and Johnson(1980)は、このような概念を「あらわれ出る概念」(emergent concepts)と呼んでいる。もう1種類の概念は、身体経験から直接的に理解されるのではなく、メタファーやメトニミーによって「あらわれ出る概念」やその他の概念に関連づけられて理解される概念である。例えば感情や時間のような抽象概念がそれに当たる<sup>1</sup>。

「あらわれ出る概念」の一種である空間概念が、メタファーによって時間概念など他の意味領域に転用されるということはよく知られている。空間概念の中でも、特に上下のような方向概念に関するメタファーは、Lakoff and Johnson(1980)においても「方向付けのメタファー」(orientational metaphors)として、1つの章を割いて議論がなされている。また、瀬戸(1995)でも「方向のメタファー」として、上下、前後、左右のメタファーについての考察がある。これらの分析の中で、LakoffとJohnsonはもっぱらHAPPY IS UP, SAD IS DOWNのような上下のメタファーについて述べており、瀬戸も上下のメタファーについて最も詳しく論じている。これらの先行研究から、方向のメタファーの中では、上下のメタファーが最も詳細に研究されているメタファーであると言える。そこで本稿では、これまであまり論じられることがなかった〈右〉と〈左〉に関わる語彙の意味拡張について、英語と日本語を比較しながら考察

<sup>1</sup> 本稿では、メタファーを類似性(similarity)と共起性(cooccurrence)に基づく意味拡張、メトニミーを近接性(contiguity)に基づく意味拡張、シネクドキを類と種(genus-species)の関係に基づく意味拡張と見なす。したがって、全体と部分(part-whole)の関係に基づく意味拡張はメトニミーに分類される。共起性の概念についてはLakoff and Johnson(1980)の第22章を参照せよ。また、メトニミーとシネクドキの分類については、瀬戸(1997)の第2章を参照せよ。

し、その意味拡張の経験的基盤について身体性や文化の観点から論ずる<sup>2</sup>。

## 2. 英語の左右

### 2.1 rightとdexterousの意味拡張

現代の英語で〈右〉と〈左〉の意味を表す語彙としては、rightとleft、そしてdexterousとsinister及びそれらの派生形がある。本章では主に、語義を歴史的に古いものから順に挙げているOxford English Dictionary(OED)と『英語語義語源辞典』に基づいて、それぞれの意味の歴史的な展開を見ていく。

まずrightについてであるが、この語は古英語期にrhitという形ですでに存在していた。OEDでは、名詞のrightの意味として〈法、規則〉が最初に挙げられており、これを原義と考え、その他の意味である〈義務(廃義)〉〈公正、正義〉〈権利〉などは、メトニミーによる意味拡張であると考えられる。なぜならば、これらの意味は原義の〈法、規則〉に付随する特性と考えることができるからである。以上の意味の用例の初出はいずれも900年頃である。そして、〈右側、右の方向〉という方向概念を表す用例の初出は1240年頃である<sup>3</sup>。〈右側、右の方向〉という意味が生じたのは、人間は右利きが多いことから〈右〉の意味の中に〈優位〉や〈正常〉という意味特徴が含まれているため、〈公正、正義〉という意味との類似性が感じられたからであろう。これはメタファーによる意味拡張である。〈右翼、保守政党〉の意味は比較的新しく、その用例の初出は1825年である。これは、ヨーロッパの議会では議長から見て右側に保守派の議員が座ることから生じた意味拡張なので、メトニミーであると言える。

次に形容詞rightの意味拡張を見てみると、その原義は〈まっすぐ、曲っていない〉であり、これらは廃義である。OEDによると、この意味での用例の初出は950年頃である。次に、〈直角をなす〉という意味が生じた。さらに、このような空間的な意味から、〈正しいことを行う性格である〉や〈道徳的に正しい〉のような、人や行為の性質に関する抽象的な意味に拡張する。まっすぐな物体に触った時には抵抗感が無く、まっすぐな道を行けば最短距離で目的地につける。〈まっすぐ〉から〈正しい〉への意味拡張は、そのような日常的な経験に基づいて〈まっすぐ〉という意味に含まれようになった〈好ましい〉という意味特徴と、〈正しい〉という意味に含まれる〈好ましい〉という意味特徴の類似性から生ずるメタファーであると考えられる。さらに〈正しい〉という意味から、精神が〈健全な〉、身体が〈健康な〉という意味に拡張する。〈心身の正常さ〉は〈正しさ〉の一種であるから、これは類で種を表すシネクドキによる意味拡張と考えられる。そして、このような一連の〈正しさ、正常さ〉に関わる意味から〈右の、右側の〉という意味が生じたのは次のような理由によるものと考えられる。まず、〈右の、右側の〉という意味でのOEDの初出用例は1205年頃のものであり、原義とは約250年の違いがある。この意味のOEDの定義は"The distinctive epithet of the hand (see RIGHT HAND) normally the stronger"であり、右手は「より強い方の手」と考えられていることがわかる。また、これは後でも述べるが、人類は左利きより右利きの方がはるかに多い。したがって多くの人にとって、右手は左手より器用である。これらのことから、英語でも日本語でも〈右〉という意味には〈強い、正常な〉という意味特徴が含まれる

<sup>2</sup> 本稿では、語や表現の意味及び意味を構成する意味特徴を〈〉で表す。

<sup>3</sup> 『英語語源小辞典』によると、古英語期には〈右側〉を表すには、swīðraが用いられた。この語の原義は〈強い〉であり、この語の意味拡張は、特性〈強い〉がその特性を有する本体〈右側〉を表すメトニミーであると考えられる。

と考えられる。以上のことから元々＜正常な＞という意味を持っていたrightが、類で種を表すシネクドキによって、＜右の＞という意味を持つようになったと考えられるのである。

副詞のrightの意味拡張もほぼ同じで、OEDでは＜まっすぐに＞が最も早い時期の意味として挙げられており、その初出用例は897年頃のものである。その後、＜直ちに＞＜完全に＞＜正しく＞という意味へ拡張する。そして＜右側に＞という意味の用例の初出は1300年頃である。

以上のrightの意味拡張の流れをまとめると、名詞の場合は、まず＜法、規則＞という意味から＜公正、正義＞が派生する。形容詞と副詞では、まず＜まっすぐ＞という空間的な意味から＜正しい＞が派生する。そして、いずれの品詞でも＜正しさ＞に関わる意味から空間的な＜右＞に関わる意味が生じている。左利きより右利きの方が多いことから、空間的な＜右＞という意味には＜正常＞という意味特徴が含まれていると考えられるので、＜正しさ＞から＜右＞への意味拡張は類で種を表すシネクドキである。

rightには様々な複合的な表現がある。right handは原義として＜右手＞を意味するが、＜最も頼りになる人、右腕＞という意味もある。また、to take the right hand ofという表現では、rightは＜名誉ある立場＞という意味を持つ。ただしこれは廃義である。また形容詞right-handedの原義は＜右利きの＞であるが、＜器用な＞の意味もあった。これも現在は廃義である。

英語にはrightの他に、右に関する意味を表すdexterousという語がある<sup>4</sup>。これは＜右側の＞を意味するラテン語のdexterを起源とする語であり、初期近代英語の時代に英語に入った。OEDでは＜右側の、右手の＞という意味が最初に挙げられているが、この意味には「まれ」(rare)の表記がある。その他に、dexterousには＜便利な(廃義)＞＜器用な＞＜ずるがしこい＞＜右利きの＞などの意味がある。＜ずるがしこい＞を除いて、dexterousが持つこれらの意味は、＜右手＞という意味を構成している意味特徴でもある。そうするとこれらの意味は、本体がその特性を表すメトニミーによって生じたと考えられる。＜ずるがしこい＞は＜巧みな＞という意味特徴の共有に基づいて、＜器用な＞からメタファーによって生じたと思われる。

以上のように、rightもdexterousも意味拡張の結果、多数の意味を持つ多義語となったが、それらが持つ意味は、方向に関する＜右＞の他は、ほとんどすべてが＜正しさ＞＜完全＞＜器用＞のような良いコノテーションを含む意味である。

## 2.2 leftとsinisterの意味拡張

この節では、＜左＞の概念を表すleftとsinisterの意味拡張について見る。leftは古英語のlyft＜弱い、無価値な＞を起源とする語である。

OEDでは、名詞のleftの意味として＜卑劣で無価値な人＞が最初に挙げられているが、これは廃義である。その次に方向としての＜左＞が挙げられているが、この意味拡張は＜卑劣で無価値な人＞と＜左＞という意味の両方に＜正しくない、異常＞という意味特徴が共通して含まれていることから来るメタファーであると考えられる。左に対するこのような意味づけについては、第4章で詳しく述べる。また政治における＜左翼、左派＞の意味もある。これは、ヨーロッパの議会でリベラルな議員は議長から見て左側に座るという慣習があることから来る意味である。これもメトニミーと考えられる。

また、OEDで形容詞として最初に挙げられている意味は＜左手の、左側の＞である。その意味の定義が“the distinctive epithet of the hand which is normally the weaker of the two”であるこ

<sup>4</sup> この語はdextrousとも綴る。

とからわかるように、左手は右手より弱いものであると見なされている。また、to see with the left eyeやto work with the left handのような表現では、leftは＜非能率的である＞ということを含意している。多くの人たちにとって左手は右手ほど器用ではない。したがって＜左手の＞から＜非能率的な＞への意味拡張は、あるものの名称がその特性を表すメトニミーであると考えられる。さらに、政治に関して＜左翼の、左派の＞という意味がある。これは名詞の＜左翼、左派＞の場合と同じようにメトニミーである。

副詞のleftには＜左側に＞という意味がある。

leftの複合表現であるleft-handedの原義は＜左利きの＞であるが、その他に＜手足の不自由な＞＜不器用な＞＜不正取引の＞＜曖昧な＞＜疑わしい＞＜不吉な＞＜縁起の悪い＞等の意味がある。原義以外は廃義である。これも原義とそれ以外の意味の両方に含まれる＜正しくない、異常＞という意味特徴に基づくメタファーであると考えられる。

次にsinisterについて見てみる。この語は＜左側の、不吉な＞を意味するラテン語のsinisterが中英語の時代に入ったものである。OEDによると、最も古い意味は＜だます意図を持った＞や＜偏見のある＞である。前者の意味の初出用例は1411年のものである。これらはすべて廃義である。これらの意味からメタファーによって＜不正直な、不公平な＞＜墮落した、悪い＞という意味に拡張していく。そして、このような悪いコノテーションを含む意味と平行して、＜左側の＞という空間に関する意味がある。＜左側の＞という意味の初出用例は1475年頃のものである。＜不正直な、不公平な、墮落した、悪い＞という意味にも、＜左＞という意味にも、＜正常でない＞という意味特徴が含まれているために、メタファーによって前者から後者へと意味拡張したと考えられる。

以上のように、元々はleftもsinisterもある種の＜正常でない＞ことを意味していたが、双方とも＜左側の＞へと意味拡張した。これは、左手は右手ほど器用ではない、すなわち＜正常ではない＞という多くの人が共有する感覚に基づいた意味拡張だと思われるが、この点については第4章でさらに詳しく述べる。

### 3. 日本語の左右

#### 3.1 「右」の意味拡張

本章では日本語の「右」と「左」という語の意味拡張について、主に『広辞苑第六版』の記述を基にして述べる。なお『広辞苑』では、語義は語源に近いものから配列されているので、最初に挙げられている意味を原義と考える。

まず「右」についてであるが、方向としての＜右＞が原義であり、その他に＜上位、上席＞という意味がある。これは漢代に、座席は右の方が上とされたことから生じた意味であり、＜すぐれた方＞を意味する。第4章でも述べるが、多くの人にとって右手は左手より器用なので、＜右手＞という意味にも＜優位＞という意味特徴が含まれていると考えられる。したがって＜右＞から＜上位、上席＞への意味拡張は、それらが＜優位＞という意味特徴を共有していることに基づくメタファーである。このように、英語のrightやdexterousと同じように、「右」には良いコノテーションを含む意味があるが、その一方で、官職における＜下位＞の意味もある。これは「右大臣」という表現の中の「右」が持つ意味であり、通常、右大臣より左大臣の方が上位である。この意味の逆転の理由については、第4章で詳しく述べる。さらに、「さて壱岐守殿へ参りて右の弟子たちに会うて」『義経後覚』の場合のように、「右」には＜以前、もともと＞の意味もあった。日本語では縦書きする際に右から左へと文章が進む。また絵巻も右から左へと進む。そのようなことから、日本では古くから右は過去、左は未来という意味づけが成立していたと思われるが、その理由は明らかではない。また政治上

の＜右翼＞の意味もある。これは、英語のrightなどヨーロッパ言語の語彙の影響だと思われる。さらに「右に出る者がいない」という表現では「右」は＜最も優れたもの＞を意味している。

以上、日本語の「右」という語の意味を見た。一部例外はあるものの、「右」が持つほとんどの意味は、英語のrightやdexterousと同じように、良いコノテーションを含んでいると言える。

### 3.2 「左」の意味拡張

本節では、日本語の「左」の意味拡張についてみていく。原田(1981:216)によると、「古語の「ひだり」の由来はヒ（日）、ダ（出）、リ（方向）だと推定されおり、太陽に向かって左、すなわち東をさした。」また、『広辞苑』には「端・へりの意のハタ・ヘタが転じた語か」という記述があり、語源ははっきりしないようである。『広辞苑』では、方向としての＜左＞が原義である。その他に、「左大臣」の「左」には＜昔、左右に分かれた官職の左の方＞という意味があり、日本では右より上位を意味した。さらに「左党」の「左」には＜酒を好み飲むこと＞という意味もある。『広辞苑』はこの意味の由来として「酒杯は左手に持つからとも、また鉾山で、左を鑿手、右を鎚手というのにおこるともいう」という記述がある。そうすると、この意味拡張はメトニミーである。さらに＜思想上・政治上の左翼＞の意味がある。これは英語のleftなどヨーロッパ言語の語彙の影響であろう。

この他に、次のような「左」に関する表現がある。「左様」は＜正しい道にたがうこと＞という意味である。また「左縄」の元の意味は＜左へ回して縛った縄＞だが、それが転じて＜物事が逆になること＞という意味がある。これは本体がその特性を表すメトニミーである。さらに「左縄」には＜物事が順調に行かないこと。経済的に苦しくなること＞という意味もある。これは＜正しくない、異常＞という意味特徴の共有に基づいて原義から派生した意味だと考えられるので、メタファーである。「左前」は元々＜左の衽を上にして衣服を着ること＞の意味で、死者の装束に用いる着方を指していたが、＜物事が順調に行かないこと。運が悪くなること＞の意味が生じた。この意味は、衣服を「左前」に着る時に伴う事態を表していると考えられるので、本体が特性を表すメトニミーである。また、つむじが左巻きの人は正常でないという俗説によって、「左巻き」には＜頭の働きが少しおかしいこと＞の意味がある。これは左巻き(の人)の特性を表すメトニミーである。「左回り」には＜順調に行かないこと、運が悪くなること＞の意味がある。これは、その意味と＜左＞という意味の両方に＜正しくない、異常＞という意味特徴が含まれていることによるメタファーである。また、「左顧」は＜目下のものに目をかけること＞の意味であり、これは中国で目上の者は右、目下のものは左に位置する習慣から来た言葉である。ここで「左」は目下のものの特性を表しているので、メトニミーである。「左遷」は＜高い官職から低い官職におとすこと。また、官位を低くして遠地に赴任させること＞の意味である。これは＜左＞という意味と＜低い官職＞の両方に＜劣位＞という意味特徴が含まれていることによるメタファーである。

以上のように、一部例外はあるが日本語の「左」には＜異常、劣位＞という意味合いが含まれる。

## 4. 左右の意味拡張の経験的基盤

### 4.1 左右の概念が生ずる経験的基盤

3章と4章では英語及び日本語の左右に関する表現の意味拡張を見た。そこで明らかになったことは、両言語ともに右が＜正常、優位＞の意味を持ち、左が＜異常、劣位＞の意味を持っているということである。本章では、両言語において左右がこの種の意味を持つに至っ

た理由について、身体的、文化的側面から考察する。それによって、左右の意味は完全に恣意的なものではなく、身体性や文化によってかなりの程度動機付けられていることを示す。

井上(1998)によると、メキシコやグアテマラ地域で話されているツェルタル語、オーストラリア先住民族のグウグ・イミディール語のように、「右」「左」に相当する語彙が存在しない言語もある。このような言語では方向を「上り側」「下り側」のように地形に関する語彙で表現したり、「東西南北」で表現したりする。しかしながら、世界の多くの言語には「右」「左」に相当する語彙がある。まず、そもそもなぜ左右という概念が生じたのであろうか。これには様々な理由が考えられるが、最も大きな原因は、身体や自然の中に左右非対称性があるということである。西山(2005)によると、身体には次のような非対称がある。まず最も重要なのは、人間には利き手があるということである。西山によると人類の右利きと左利きの割合は9対1である。サルには利き手はないようだが、打製石器の作り方から推定すると、すでに180万年前のホモ・ハビリスの時代に57%が右利きであったという。また、人間には利き手の他に、利き足、利き目、利き耳もある。次に、人間など哺乳類では、内臓の配置が非対称であり、人間では左側に胃、脾臓、右側に肝臓、胆のうがある。心臓の位置は人体のほぼ中央であるが、左側に張り出した形状になっている。さらに、脳も左脳と右脳で機能の分化がある。通常我々は内臓の配置や左右の脳の機能について意識をすることはないが、心臓の鼓動などで、身体の不対称性を感じることもある。

また、西山(2005)によると、自然界においてはニュートリノの自転が左回りであったり、太陽系の惑星の公転が左回りであったり、地球の自転が北極の延長線上から見ると左回りであったりする。ニュートリノのような素粒子の動きは人間の感覚器官で捉えることはできないが、視覚的に捉えることができる天体の動きは、左右という概念の形成に関与したと考えられる。

以上のような、身体や自然の不対称性を経験することによって、左右という概念は生じたと考えられる。

#### 4.2 右が優越する理由

では、英語及び日本語において、「右」が＜正常、優位＞、「左」が＜異常、劣位＞と意味付けられたのはなぜであろうか。ここで参考になるのは、フランスの社会学者、民族学者であるロベール・エルツの研究である。エルツ(2001)は、人間の右手が、そしてそれに伴って文化や社会において右側が、左手や左側より優越している理由について詳細に検討している。エルツが挙げている理由の一つは、有機体の非対称性である。それは前節で述べたのと同じように、人間の多くが右利きだということである。これは左脳が発達していることによっても考えられるが、逆に右利きだから左脳が発達したとも考えられるという。しかし、エルツは人間に形質的に最も近い動物が両利きであることから、右手の優位は人類の身体構造に内在するものではない可能性もあるという。エルツの考えでは、人には少数の先天的に左利きの人と右利きの人がいて、その中間に、右手を使う傾向があるがほとんど同じように両手を使うことができる多数の人がいる。しかし現実には右利きの人が多いのは、有機体に外在する影響力によって、固定され強化されるからであるという。エルツは、右手を優位とするような影響力として、未開民族の二元論的思考に着目する。未開民族はあらゆるものを「俗なるもの」と「聖なるもの」に分類する。彼はこれを宗教的両極性と呼んでいる。そして、このような聖と俗の二元論によって「手」も分類されるのであるが、その際、左手より右手の方が器用でわずかに生理学的に優位なため、右手(それに伴って右側)が聖、左手(それに伴って左側)が俗という意味付けがなされたというのである。

筆者は、このような二元論的思考に基づく右の優位に関する説明は説得力があると考ええる。なぜならば、左右に関する宗教的両極性が見られるのは、未開民族だけではないからである。聖書にも次のような右を聖または優位とする記述が見られる。

主は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」  
(詩篇110.1)

「主よ。あなたの右の手は力に輝く。主よ。あなたの右の手は敵を打ち砕く。」  
(出エジプト記15.10)

彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』  
(マタイの福音書25.32-34)

『イメージ・シンボル辞典』によると、「右の座」とは最高位またはその次の位を意味する。このような「右の座」についての言及は、マタイの福音書22.44、マルコの福音書16.19、ルカの福音書22.69、ローマ人への手紙8.34、ペテロの手紙第一3.22にも見られる。

また原田(1981:217)は、ヨーロッパの民俗世界でも左右に関する象徴には明らかな差別があり、左は神秘の側、悪霊の住む場所であり、母胎のなかで男子は右、女子は左に位置していると信じられていたという。また、原田は右に正と聖と光を、左に邪と俗と闇を配する民族の方が世界的に多いと述べているが、このような状況は『世界シンボル大事典』や『イメージ・シンボル大事典』のrightやleftに関する記述でも確認することができる。

以上のような右の身体的、文化的優位性が動機付けとなって、英語と日本語において右に関する語彙が＜正常、優位＞、左に関する語彙が＜異常、劣位＞という意味を持っていると考えられるのである。

#### 4.3 左が優越する理由

日本や中国でも右が優越していることは、3章で見た「右に出るものがない」「左遷」「左道」といった表現に表れているが、それと反対の意味付けが見られることがある。『世界シンボル大事典』によると、中国には「左は、名誉の側である。左は、天を表す。だから《陽》である。左は、しばしば、大地で《陰》である右に勝る」という考え方があり、老子の『道德経』には「吉事は左をたつとび、凶事は右をたつとぶ」という言葉がある。

しかし塚崎(2005:48-59)によると、中国における左の優位は絶対的なものではなく、時代、男女の性、儀式の種類などによって、尚左と尚右が交替しうる。例えば、拱手の挨拶をする時には、男は左手で右手を隠し、女は右手で左手を隠す。しかし喪中の時は、男は逆に右手で左手を隠す。これは、男の場合は左が、女の場合は右が吉となるからである。また、戦争の時に右手は血を流し殺す手となる。このことにより右手は凶事や酒宴と結びつき、それらにおいては尚右である。左手は和解と礼楽の手であるので、吉事や儀式では尚左となる。歴史的には、夏・殷・周の時代は、朝官は尚左であり、燕飲・凶事・兵事は尚右である。武がすべてに優先する戦国時代は尚右であるが、軍中は尚左である。秦、両漢の時代は朝官を含めてすべて尚右である。六朝では朝官は尚左、燕飲は尚右である。唐は尚左をさらに広げ、それ以降は、元を除いて清に至るまで尚左を受け継いでいる。

塚崎(2005:19-20)には、古代日本において左が優越していたことを示す 9 つの証拠が挙げられている。

- ① イザナキ・イザナミの国生みのとき、国の柱のまわりを男神が左から女神が右から回った。平田篤胤は『古史伝』で「そもそも左は男の位にて尊く右は女の位にて卑しき事は、……男女の御祖二神の産霊大神を生いし給ひし時より、神なからに定まれる真理にて……」と述べている。
- ② 日本で最も尊い神とされる天照大神は、イザナキが左手で白銅鏡を持った時に、また、みそぎで左の目を洗った時に生まれている。
- ③ 日本書紀、古事記において、左右に言及する時は、必ず左から説明が始まっている。
- ④ みそぎをするためにイザナキが投げ捨てた左手の腕輪から生まれた三神の名前には奥がついており、右手の腕輪から生まれた三神の名前には辺がついている。古代においては、奥は辺より尊ばれていた。
- ⑤ 儀礼の際に南面した天子の左から日が昇った。
- ⑥ 第一番目の座席を左座という。
- ⑦ 左大臣は右大臣より上位であった。
- ⑧ 「めづらしき君を見むとぞ左手の弓とる方の眉根かきつれ」という万葉集の歌は、左は神聖な側なので吉兆であることを示している。
- ⑨ ハニワに見られるように、上代は左衽であった。

塚崎はこれらの根拠について検討し、そのうちのあるものは中国からの輸入であったり、上代とは無関係であると述べている。しかし、中国からの輸入であれ、時代が上代以外のものであれ、日本にもある時代には尚左の考え方があったのは明らかである。このように、中国及びその影響の強い日本においては、時代によって尚左と尚右の両方が見られ、一貫して尚右の立場を取るヨーロッパとは異なる。このような文化的理由から、日本語では右を優位とする表現ばかりでなく、「左大臣」のような左を優位とする表現も生まれたと考えられる。

## 5. 結論

本稿では、英語と日本語の〈右〉と〈左〉に関する語彙の意味拡張と、その拡張の経験的基盤について考察した。その結果、まず英語と日本語の双方において、方向に関する意味の他に、〈右〉に関する語彙は〈正常、優位〉、〈左〉に関する語彙は〈異常、劣位〉という抽象的な意味を持っていることが明らかになった。そして次に、右と左がこのような対照的な意味と結びついている理由について検討した。そこでは、人間には右利きが多く、そのような右手の機能上の優越性と多くの民族が持つ「聖と俗」という二元論的な世界観が結びついて、右が聖、左が俗という意味付けが生じたというエルツ(2001)の主張を取り上げ、その主張が妥当であると述べた。また「左大臣」「右大臣」のような日本語の表現で、上記の意味付けの逆転が見られるのは、中国では時代によっては尚左であったため、日本もその影響を受けた時代があったからだと論じた。以上のように、英語と日本語の〈右〉と〈左〉に関する語彙の意味拡張は、我々の身体性や文化という要因の中に十分に動機付けがあると言える。

## 参考文献

エルツ, ロベール(2001) 吉田禎吾・内藤莞爾・板橋作美(訳)『右手の優越 宗教的両極性



の研究』東京：筑摩書房。

原田馨(編)(1981)『左と右の世界』東京：朝倉書店。

井上京子(1998)『もし「右」や「左」がなかったら一言語人類学への招待』東京：大修館書店。

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago and London: University of Chicago Press.

西山賢一(2005)『左右学への招待 世界は「左と右」であふれている』東京：光文社。

瀬戸賢一(1995)『空間のレトリック』東京：海鳴社。

瀬戸賢一(1997)『認識のレトリック』東京：海鳴社。

塚崎幹夫(2005)『右と左のはなし 自然界の基本構造』東京：青土社。

#### 辞書・事典類

シュバリエ, ジャン、アラン・ゲールブラン(1996) 金光仁三郎・熊沢一衛・小井戸光彦・白井泰隆・山下誠・山辺雅彦(訳)『世界シンボル大事典』東京：大修館書店。

フリース, アト・ド(1984) 山下主一郎他(訳)『イメージ・シンボル事典』東京：大修館書店

小島義郎・岸曉・増田秀夫・高野嘉明(編)(2007)『英語語義語源辞典』東京：三省堂。

中島文雄・寺澤芳雄(編)(1970)『英語語源小辞典』東京：研究社。

新村出(編)(2008)『広辞苑 第六版』東京：岩波書店。

Simpson, John A. (ed.) (2002) *The Oxford English Dictionary SECOND EDITION on CD-ROM Version 3.0*. Oxford and New York: Oxford University Press.